

好きだった人たちへ捧ぐ

タン塩レモンティー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺が悪友と再会し、中学時代を語り合う。

目次

好きだった人に捧ぐ

俺は走った。一心不乱に走った。

― それは恋か、ただの憧れか ―

季節外れの汗をたらし、足元がおぼつかなくなりながら、走る。

「くっそー!」

遠回りしてようやく駅が見えてきた。上り列車がホームに停まっている。

― どうしていいのか分からなかった ―

俺は改札を抜けて全速力で跨線橋を渡り、上りホームにたどり着いたが、列車はちょうどホームを離れてしまっていた。

「好きだ!!」

気がつくと、届くはずもない想いを全力で張り上げていた。たくさ  
んいる夕刻のホームの人達は、びつくりするやらざわつくやらで、そ  
れがしばらく収まることはなかった。

これが中学生の頃、実際に体験した事をもとに俺が作った小説。そ  
れは、ある小説投稿サイトに載せたものだ。

あの頃は子どもで、俺はどうしようもなく若かった。成人した今で  
は読むこともない。サイトもいつしか閉鎖されていた。

(俺も若かった……)

久しぶりに自分が小説を書いていたことに思い出していた。

実は、この人物は実在する。彼女の名前は香織。ほぼ体験談だ。

妄想も多少あるが、香織と偶然会った事や中学時代、友達だけど親  
友じゃないと言われた事も本当である。その後、彼女に会うことはな  
く、この歳までどういう意味か分からないまま過ごしてきた。

だが、その答えを知るチャンスがやってきた。10年ぶりに同窓会  
が開かれることになったのだ。

今回は彼女も参加するという話を友達から聞いて、俺も参加する事  
にした。

初夏、日が暮れたというのに蒸し暑い。

「あつちい……」

この駅に降り立ったのは学生時代以来だろうか。

改札を出て、当時はなかった北口に降り立つ。とある情報によると、最近橋上駅舎化して、同時に北口が出来たそうだ。

なんでこの駅に降りたかって？ それはこいつと約束してたからだ。

「よっ」

振り向くと、俺の待ち合わせ相手こと悪友、夏子が立っていた。

近くのファミレスに着くと彼女は、適当な食べ物とドリンクを注文し、なにやら楽しげだ。俺もとりあえずドリンクを頼み「最近どう？」なんて話しながら味わっていた。

すると、唐突に夏子が切り出した。

「あの頃は若かったわね」

「どうした？」

俺が切り返すと、彼女が続けた。

「県立高校の合格発表日、告白したでしょ」

そういえばそんなこともあった。この機会だ、彼女は何を思っていたのか聞いたのか聞いてみようと思った。

「なあ夏子、お前中学ん時俺の事どう思ってた？」

てか、俺の事好きだっただろ的なセリフをよく言えたものだ。

「あの時『振られちゃった。てへっ♪』とか言ったよな」

「覚えてたんだ、私が言った事」

「そのあと、『普通の友達に戻りまーす』って言ったわあ」

彼女は目を細めながら笑い飛ばしてたが、突然、彼女は少し黙ってから一言、こう言った。

「好き、だったかな」

意外な一言だった。

「初耳だな」

「だって君は香織ちゃんを見てたじゃない。ずっと……」

あきらかにわざとらしくかった。

「あのね、親友じゃ嫌だったんだ。私」

「え？どういうこと？」

俺は聞いたが、夏子は聞こえてないフリをしているようだった。

「中学の時、君はカッコよくて、みんな憧れてたんだよ」

そんなのはじめて聞いた。 まあ、いつもの冗談だろう。

「ほら、同じクラスの香織ちゃんも君に気があったんじゃない？」

しかし彼女は何を言いたいのか？ 会話をしながら、中学の時、香織に『友達だけど親友じゃない』と言われた事を思い出していた。

香織か、よく覚えてる

彼女はある女の子グループの1人であったが、いつの日からか仲間はずれにされ、一人でいることが多かった。

なぜそうなったのかはわからないが、中学生だ。些細な事でそうなったのだろう。

ほかに、食虫植物が好きとか、美術部では、牛の骨格のデッサンをしているとか、さまざま噂が立ったが、よくないものが多かったのは間違いない。

そんな時、放課後、屋上に来るよう呼び出された。

告白か。友達のままでいいのにと。

気持ちを聞いたら俺はどう答えるのだろうか？

ワケがわからなくなり、その日香織の所へは行かなかった。

季節は流れ、高校入試やらで日々が忙しくなったが、香織を思わない日はなかった。だからか、第一志望の高校は不合格だった。

卒業式前日、俺は再び香織に呼び出された。

今度は逃げずに待ち合わせ場所に行くと、突然こう切り出された。

「私、卒業したら引越すの」

衝撃の一言だった。さらにこう続いた。

「友達だけど親友じゃない」

その日は、季節外れのなごり雪だった。

「あまり思い出したくはなかったよ」

夏子をあしらいつつ、中学時代の思い出から帰ってきた俺がそう言った。

「私香織ちゃんに君の事どう思ってるか聞いたことがあるの」

「それで？」

「彼女、君の事友達だって」

「即答か!!」

友達か、でもあの頃彼女はそれ以上の存在になりたいと思っ  
た。

「でも香織ちゃんも、絶対君に気があったよね」

女って生物は何故こんなに鋭いのか。

俺は香織と友達でいたかったんだと思う。女性として魅力がな  
かったとかそういうのではないが、恋愛なんてあの頃よくわからな  
かったし、年頃の女子は精神的に大人とは言っても、しよせん中学生。  
まだまだ子供だ。

それより俺は気になった事がある。

『香織ちゃんも、絶対君に気があったよね』

「いまさらだな」

「そりゃ分かるよ。バレバレだったもん」

からっとした笑顔で夏子が言う。いつしか飲み物のコップも水滴  
だらけだ。

その時、突然俺のスマートフォンが震えた。

『羽目を外し過ぎないように』

それを覗きこんだ夏子がニヤニヤした。

「親しき仲にも礼儀ありだ」

「奥さん大事にしなさいよ。あと、同窓会、香織ちゃんも来るって」

俺が返すと、彼女はさらにニヤニヤした。

「もう少し優しくできないのか、夏子!」

そこには、まるで太陽のように明るい、彼女の表情があった。

同窓会では香織に会えるだろう。中学生時代に俺をどう思ってた  
か、正直知りたい気持ちはある。だが今となってはそんなことは些細  
なことだ。

夜も深まり、陽炎の漂うこの場所にも心地よい風が吹き抜けてい  
た。